

指導マニュアル:令和6年度 一般選抜 過去問(国際関係コース)
～日本の「二面性」を暴き、普遍的なレイシズムの文脈で捉え直す～

1. 過去問の核心:なぜこの課題文が出題されたのか

令和6年度の課題文(貴堂嘉之『大学生がレイシズムに向き合ってみた』)は、島根県立大学が求める**「批判的かつ客観的な歴史認識」**を問う極めて重要な素材です。受験生が陥りがちな「日本人は人種差別を撤廃しようとした善人である(国際連盟での提案など)」という一面的な自画像を、近代日本の周辺支配という「加害の事実」によって相対化させることを狙っています。

2. 設問別指導の急所

【問1】「無関係ではなかった」の論理構造(100字)

- ・ 指導のポイント: 単に「差別があった」ではなく、「欧米の論理を輸入し、積極的に利用した」という**主体的関与(当事者性)**を記述させます。
- ・ 必須要素: 「分類・序列化の思想の受容」「周辺支配の正当化」「米国の法制度の模倣」。
- ・ 指導コメント: 「『無関係ではない』という二重否定の表現を、『当事者として積極的に関わった』という肯定の論理で言い換える練習をしましょう。」

【問2】「民族」という言葉の戦略的機能(150字)

- ・ 指導のポイント: なぜ「民族」という言葉が便利だったのか、その**「逃げ(ジレンマ)」**の論理を解説します。
- ・ 必須要素: 1. 日本が支配者(加害者)であり、同時に欧米からの被差別者(被害者)であったこと。2. 自らの差別を「人種差別」と呼べば、自らの支配も否定せざるを得なくなる矛盾。3. その矛盾を回避・隠蔽するための装置としての「民族」という用語。
- ・ 指導コメント: 「『支配者かつ被差別者』という二面性を論理の核に据えよう。言葉のすり替えが『知的な回避』であったことを指摘させることが重要です。」

【問3】「世界との繋がり」と「自画像」の論述(800字)

- ・ 指導のポイント: 800字という多めの字数を活かし、抽象論から具体例、自己の展望へと「論理の深まり」を作らせます。
- ・ 推奨構成:
 1. 導入: 「人種差別」と再定義することの意義(普遍的文脈への接続)。
 2. 歴史的 분석: 課題文を踏まえた日本の二面性への批判。
 3. 現代的応用: 日本国内の外国人差別などを、世界的なレイシズムの文脈で具体的に論じる。
 4. 結び: 島根県立大学のキーワードである「自画像」を用い、自分自身の偏見を問い直す知的労働の決意。

3. 合否を分ける「添削」の視点

- ・ 合格圏: 「民族差別」という言葉に隠された「加害性の隠蔽」という構造を見抜いている。
- ・ 不合格圏: 日本が欧米から差別された被害の側面(黄禍論)ばかりを強調し、周辺諸国への加害の側面に触れない。または、「差別はいけない」という道徳的な結論のみで終わる。

4. 指導用ワーク:生徒への問いかけ

1. 「日本人が1919年の国際連盟で『人種差別撤廃』を提案したとき、なぜ朝鮮や台湾での差

別については触れなかったと思う？」

2. 「『民族』という言葉を使うことで、私たちは何を『見なくて済む』ようになっているのだろうか？」
3. 「君がニュースで見るアメリカの人種差別問題と、日本の技能実習生の問題を繋いでいる『共通の論理』は何だと思う？」

講師へのアドバイス： 本問の指導を通じて、生徒に**「自国の歴史を多層的に見る勇気」**を持たせてください。島根県立大学は、心地よい自画像に安住する学生ではなく、不都合な真実を直視し、そこから新たな共生の論理を構築できる学生を求めています。